

香道真傳 全

香道真傳 全

関親卿著 二卷一冊 版本

東北大学附属図書館 狩野文庫蔵

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（ ）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（ ）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。



更なる火どりにたきて、かをり(香)ことなる  
 をもちあそびひろむかゝるをすまし  
 ぞれぞれの道にいたるたよりになれり  
 又ハニくさ(種)三くさ(種)たきまして、そのな  
 をききあらそう事もあり。それは、ちかき  
 世よりの事なれど、ややおとろうる(衰)にはあらね  
 ど、道のいたりをしる人、今はすくなし。

それ香は火どりにたきて、かをり(香)ことなる  
 をもちあそび、あるは、こころをすまし、  
 それぞれの道にいたるたよりになれり。  
 または、ニくさ(種)三くさ(種)たきまして、そのな  
 をききあらそう事もあり。それは、ちかき  
 世よりの事なれど、ややおとろうる(衰)にはあらね  
 ど、道のいたりをしる人、今はすくなし。

任々齋（関親卿）これをなげき、初学の人のために書をつづりて二冊とす。ある人「この事のおもむきをしるせよ」とのめにしたがい、おろかなる筆にまかせぬるは、ことわりきこえ候はずや。

中書侍郎資幹

香道真傳跋

宋洪芻撰香譜蓋為樂曠者言之也。夫炷香能令人居間実茶窓之佳友而文房之雅翫也。聞之者怡々朗々唯知其一美物也。其氣清爽通人鼻根了々不容汚濁。因有似君子者也。然其翫之也。苟非其人則風流不虛行也。昔者宗信始立香則今亦親卿為之真傳。可謂能事畢。

香道真伝跋

宋洪芻撰香譜。蓋為樂曠者言之也。夫炷香能令人居間実茶窓之佳友而文房之雅翫也。聞之者怡々朗々唯知其一美物也。其氣清爽通人鼻根了々。不容汚濁。因有似君子者也。然其翫之也。苟非其人則風流不虛行也。昔者宗信始立香則今亦親卿為之真伝。可謂能事畢。

中書侍郎 資幹

矣世之好香者增事於此則當不  
失其為風流耳

安永丙申冬 張藩 久曉台

矣。世之好香者增事於此則當不  
失。其為風流耳。

※ 卷末に訓読案を掲載

安永丙申冬

張藩 久曉台

凡例

一 愚閑窓よりとりてはなき筆をとりて、いにしえ  
香乃に名有る志野、建部先師の遺篇と書き  
つくるに、遂に二巻となりぬ。もしくは、他の披  
覽に漏るるとも、香道に初心の人には便りすくなく  
ん。唯この道にふけり、故実を探り給わん人には、或いは  
少しき補いともならん物か。この中のことばに頭有る  
秘あり。その秘したる事は、伝をおしむ(惜)にはあらざれ  
ども、道をおもんずるがゆえなり。愚、その蹟礫に

香道真傳上 凡例一

凡例

一 愚、閑窓によりよりつたなき筆をとりて、いにしえ  
香道に名有る志野、建部先師の遺篇を追いて書き  
つくるに、遂に二巻となりぬ。もしくは、他の披  
覽に漏るるとも、香道に初心の人には便りすくなく  
ん。唯この道にふけり、故実を探り給わん人には、或いは  
少しき補いともならん物か。この中のことばに頭有る  
秘あり。その秘したる事は、伝をおしむ(惜)にはあらざれ  
ども、道をおもんずるがゆえなり。愚、その蹟礫に

統つて玉淵と云ふは容易小宗と云ふは  
むれつて所也好子主非統と云ふは予が  
大成香宗人

一 此中米川氏蜂谷氏の傳と云ふ米川常白の  
香人皆知る所なり。蜂谷氏は常白の男(息子)玄察の門人  
宗榮といふ人也。予子宗先と二代香を以て京  
師に賞せらる。香道を米川氏にまなぶといへども、  
また別に伝あり。故に、他の「米川流」と唱ふる者とは  
小異あり。然るに、「宗先」壯年にして没せられしかば、  
小異あるは宗先壯年にして没せられしかば

一 門人何某、その嗣ぎを取り立て、今に香家とよぶ。予、その  
門に入らざれば、当時の事をしらず。予が伝ふる所は、  
「宗榮」、「宗先」二代の門人、横田几山、鈴木了古二  
老人に聞ける所なり。

一 此中大枝氏と云ふは、則ち浪華の「流芳子」なり。  
西三条殿伝というを以て「御家流」と唱ふ。この人  
著述の香書、数多世に行わる。もつとも論説多けれ  
ば、その言を挙げて取捨をなす。その中『秘伝書』を  
改正し、『付録』二巻をあらわせり。もつとも香道の龜鑑  
改正し、『附録』二巻をあらわせり。もつとも香道の龜鑑

既つて玉淵をしらず。容易に筆をとる事

もつとも恥ずべき所なり。好子、その非説を正さば、予が  
大いなる幸いならん。

一 この中、米川氏、蜂谷氏の伝をいう。米川常白子は、  
香人皆知る所なり。蜂谷氏は、常白の男(息子)玄察の門人  
「宗榮」といふ人なり。その子「宗先」と二代、香を以て京  
師に賞せらる。香道を米川氏にまなぶといへども、  
また別に伝あり。故に、他の「米川流」と唱ふる者とは  
小異あり。然るに、「宗先」壯年にして没せられしかば、

その門人何某、その嗣ぎを取り立て、今に香家とよぶ。予、その  
門に入らざれば、当時の事をしらず。予が伝ふる所は、  
「宗榮」、「宗先」二代の門人、横田几山、鈴木了古二  
老人に聞ける所なり。

一 この中、「大枝氏」と云ふは、則ち浪華の「流芳子」なり。  
西三条殿伝というを以て「御家流」と唱ふ。この人  
著述の香書、数多世に行わる。もつとも論説多けれ  
ば、その言を挙げて取捨をなす。その中『秘伝書』を  
改正し、『付録』二巻をあらわせり。もつとも香道の龜鑑

多かる物なり。志あらん人の熟覧し給うべし。

任任齋親卿



香道真傳上目録

香道發端

志野流香家ノ傳

香道大意

付 或るひとの問う 並びに建部流の事

十組之習

香道真傳上 目録

たる物なり。志あらん人は、熟覧し給うべし。

任任齋親卿



香道真傳上目録

香道發端

志野流香家の伝

香道大意

付 或るひとの問う 並びに建部流の事

十組の習

香道真傳下目録

六國之解

陰陽之論

五味之辨

香の茶會の事

一種聞き並に継香の傳

香道真傳上

洛下 閑親卿著

香道發端

文香樹初め本朝に渡る事は、推古天皇の御宇、  
 沈木淡路島に漂着す。島人、香木たる事をしら  
 ず、拾い得て竈に焼きしに、その煙、遠く薫じ  
 ければ、島人驚き、これを帝に献じ奉りしより  
 傳われり。その後、聖武皇帝の御宇に、西蕃より  
 「黄熟香」を奉る。帝、これを東大寺に納めたまひ  
 代々の宝となす。則ち世にいう「蘭奢待」これなり。然れども

香道真傳上

香道真伝下目録

六国の解

陰陽の論

五味の弁

香の茶會の事

一種聞き並びに継香の伝

香道真伝 上

洛下 閑親卿著

香道發端

それ香樹初めて本朝に渡る事は、推古天皇の御宇、  
 沈木淡路島に漂着す。島人、香木たる事をしら  
 ず、拾い得て竈に焼きしに、その煙、遠く薫じ  
 ければ、島人驚き、これを帝に献じ奉りしより  
 傳われり。その後、聖武皇帝の御宇に、西蕃より  
 「黄熟香」を奉る。帝、これを東大寺に納めたまひ  
 代々の宝となす。則ち世にいう「蘭奢待」これなり。然れども

唯是と云佛像と送り又是仏神に焼  
 供養せしむるに似ていふに「合香」初め  
 唐土より来たる。「今の焼物これなり」帝をはじめ奉り、  
 公卿諸司に至るまで、風雅の人、これを翫び家  
 々の工夫をなし、伝へ事となりぬ。また、その後、寛  
 和年中、花山院の御時、高麗国より「石公」と云う、  
 人來たりて香を炷き翫ぶの由、叡聞に達し、内裏へ  
 召され、香炉に火を包み焼かしめ給うに、その薫りほの  
 るれ香煙小火と包焼しありふと量りわの

ちて幽煙富士に似たりと御感遊ばされしより、  
 大内人の翫びとはなりぬ。これより附説をなし、  
 伝へごとありとなん。それより後、後鳥羽の院の  
 御宇、名香の品を定め給いければ、鎌倉の右  
 大将家も、上より香の一卷をうけ得させ給  
 いしといえり。然れども、その伝委しからず。  
 室町家創業の頃に至つて、もっぱら賞翫  
 し給う事になりぬ。故に、足利家伝來の御  
 香、三条殿御家の名香、佐々木道譽所持名

香道直傳上

二

香目録これあり。大枝氏一木に銘し弄ぶは道譽に初まる」といへるは誤れり」しかは  
あれど、その法、いまだととのわざりき。式を立て、道により「香道」と名づけ、専ら世に行わるる事は、東山殿に初まる事、明らけきものなり。

志野流香家の傳

慈照院義政公 号、東山殿、香道命、宗信。

逍遙院實隆公 稱、西三條殿、香則、傳、宗信。

志野宗信

名、三郎九衛門、宗信、以、東高法名、義政公之近士也、兼、主命、創、香道、矣、宗信、男、又、三郎、祐憲、号、參、雨齋、香業、受、父。

志野宗温

志野省巴

宗温、男、弥、二、郎、信、方、号、不、寒、齋、香業、受、父。

志野氏の香家始也。始れども、義政公、俄かにこれに命じ、實隆公、獨り是と知し、之を承り、又宗信一人、道とくむといふも、わすす支物の生や、大木、俄かに大地より涌出するに、あらざ。また、より生じ、枝葉次第に茂り、花葉をなすが如し。道もまた然なり。香を弄ぶ事、上がりし代より始まり、尊氏公、義満公及び義政公治世に至りて、専ら盛んなり。然れども、その法、いまだと

香目録これあり。「大枝氏「一木に銘し弄ぶは道譽に初まる」といへるは誤れり」しかは

あれど、その法、いまだととのわざりき。式を立て、道により「香道」と名づけ、専ら世に行わるる事は、東山殿に初まる事、明らけきものなり。

志野流香家の伝

慈照院義政公 「東山殿と号す。香道を宗信に命じたまう。」

逍遙院實隆公 「西三條殿と稱す。香則を宗信に伝えたまう。」

志野宗信 「名は三郎左衛門宗信。名乗りを以て法名と爲す。義政公の近士なり。主命を蒙り香道を創る。」

志野宗温 「宗信の男。また三郎祐憲。參雨齋と号す。香業を父に受く。」

香業を父に受く。」

志野省巴 「宗温の男。弥二郎信方。不寒齋と号す。香業を父に受く。」

と号す。香業を父に受く。」

志野氏は、香家の始めなり。然れども、義政公、俄かにこれに命じ、實隆公、獨りこれを知らしめすにもあらざ。また、宗信、一人この道をはじめというにもあらざ。それ物の

生ずるや、大木俄かに大地より涌出するにあらざ。二葉より生じ、枝葉次第に茂り、花葉をなすがごとし。道もまた然なり。香を弄ぶ事、上がりし代より始まり、尊氏公、義満公及び義政公治世

に至りて専ら盛んなり。然れども、その法、いまだと

のふりた故小義政公風流雅士小命一  
 法則と定めし相阿弥珠光肖柏宗信の類  
 其道と修し、その法をなせり。中にも宗信、香式  
 及び聞き達々よく、香意に通ず。故に、義政公、  
 香の一事を宗信一人に命じ給う。時に三条殿、  
 有職に委しく、和歌の達人にして、雅風当世  
 に冠たり。こゝを以て宗信、私に定めず。数輩に談  
 ぜし上、なお実隆公へうかがい奉り、考正を請うて、香  
 式まさに備われり。故に、後人或いは「三条家御流」と

稱し、また「相阿弥流」などと唱ふるといへども、正しく  
 香家と稱すべき者は宗信一家なるべし。  
 或るひと曰く、『香道秘伝書』に「宗信筆記」あり。その  
 奥書に云う。  
 右の条々口伝の事、若年の時より数十年、  
 三条殿へ懇望致すに依って仰せ聞かせらる。たとえ子孫たりとも抑え  
 置き候。秘せらるべし。第一この道、別人相伝え申す族、努々有る  
 まじく候。その故は、唐物目聞き方、以下能阿弥、真  
 相、珠光、松本、拙者に相究まる由、聞し召され候えども、  
 相珠光松本拙者、相究申すは、  
 相珠光松本拙者、相究申すは、  
 相珠光松本拙者、相究申すは、  
 相珠光松本拙者、相究申すは、

香道真傳上

當時は存知の者、数多これ在る由に候。香の一儀に於いては別人存知ざる様にありたく思し召さるる由、誠に辱かたじけ(かたじけな)き尊意古今ありがたき子細に候。その心得なされ、この一冊外見有るべからず候。自然、志深く執心の仁は、その覚悟見届け、条数の内**抜き**相伝有るべし。無文字の上、憚り多き言葉の体、**旁**以て他見有るべからず。その頃、所勞の砌存じ立ち次第不同に調え置くものなり。

文龜元年九月日

宗信

これと母の三條殿と香の家は一人

由傳授なされ「別人存ぜざる様にありたく思し召す」との御意を蒙りたれば、実隆公は、師にて宗信は弟子なるべし。然れば、香家と称するは三条殿にてあらずや。予答えて云う。先書の文面によりて見ればしかり。然れども、予が伝ふる所、宗信の言葉書きに曰く、「定めめの法、評義すべきよし仰せを蒙り、肖柏、宗祇、珠光などの有職の人と議し、決定の上を三条西殿へうかがい、御上へ申し上げ、定まりたる」と

香道真傳上

八

これを以て見れば、三条殿より香道、宗信一人に

宗信

云々 以上宗信の文前後略す

は書ふる事、衆議決して逍遥院殿に窺ひ相定むる事、明之能く秘傳去宗信の文、宗信の於香の一義、別人存知ざる様にありたく思召さるる由、誠に辱き尊意」とあるは、東山殿の尊意にて有るべし。これにて「唐物目聞き、能阿弥、真相、拙者に相究まる由聞き召され候へども」の文言聞こえるなり。三条殿、何ぞ唐物目利きの人数を定め、且つ香道を宗信一人に命ぜらるべきや。宗信は、東山

殿の小臣なり、尊意と書し、仰せを蒙るといは、みな東山殿の御命なるべし。実隆公も、衆議決定の上窺ひ定むる程の御事なれば、香道の達人なるは申すにおよばずといえども、貴門なり。名家なり。この一辟の技芸を以て、香家と称するは、還って恐れ多からんものか。

香道大意

香家者流或いは組香といやして、道に入るの「みち橋」とい、また組香によせて多く聞きて達をわかつの便りとするのみ。その奥義は、別に伝ありといえり。しか

香道真傳上

六

云々。「以上宗信の文、前後略す」

この書による時は、衆議談の上、逍遥院殿へ窺い、相定めたる事明らかなり。然れば、『秘伝書』宗信の文に云う、所の「香の一義に於いては別人存知ざる様にありたく思召さるる由、誠に辱き尊意」とあるは、東山殿の尊意にて有るべし。これにて「唐物目聞き、能阿弥、真相、拙者に相究まる由聞き召され候へども」の文言聞こえるなり。三条殿、何ぞ唐物目利きの人数を定め、且つ香道を宗信一人に命ぜらるべきや。宗信は、東山

香道大意

殿の小臣なり。尊意と書し、仰せを蒙るといは、みな東山殿の御命なるべし。実隆公も、衆議決定の上窺ひ定むる程の御事なれば、香道の達人なるは申すにおよばずといえども、貴門なり。名家なり。この一辟の技芸を以て、香家と称するは、還って恐れ多からんものか。

して其奥は乃ぬるとい或はさざり方の秘式と秘  
 又相合香連理香は乃風流様々と清きといは  
 るなりとす所とあらん人か、ままの道とゆや  
 和歌より、深教小まつくく明らけ、ま  
 志野宗信曰ま香は風流と元として和歌の乃  
 小入をさ媒し、じり香合をりてあり、焼物合の  
 乃香合、これまま心育く、の事とて、文  
 ふうしたものを、い、い、香の落小まら、  
 せ、勢或はさ、な、ふとめて風流の便りとし、

こころをすまし、善道にみちびかん為なり。且つ、立つにも  
 居るにも、身も心も清浄にして、香の匂ひのかたちな  
 く、しかも虚空にみち有るにもあらず、無にもあらず、  
 物にとどこする事なしといえども、いかなる少しの隙  
 にもよく至るを、道心の工夫のもととす。「この大意を以て  
 身を治めこころを正しくすべし」と示されたり。これ  
 香道の大意、真伝端的の所なり。鎌倉家および室  
 町家に至りて、禅法大に行われ、諸大徳、壮んに禅  
 宗を唱う。宗信及び茶人珠光の徒、一休和尚に

香道真傳上

七

香道カウダウとていふは、道ミチとていふは、質シツとていふは、三條殿ミヤノノミヤノに從したがつて和歌ワカによるを文フミとし、しかして初学ハツガク和歌ワカに入るの媒マエ、道ミチに趣オモくの途橋ツチハシとす。真マコトにこの道ミチ文質フミシツ彬々ハヤシたるものなり。豈ウハに君子クニノミコ弄アソばざるべけんや。  
 或ある問と曰いふ。香道カウダウ、禅法ゼンポフによるとならば、他宗タモウの事コトとして香カウを弄アソぶまじきや否いなや。  
 答こたえて云いふ。それ道ミチの大オホいなるは三教サンキョウなり。「本朝ホンテウにては神、仏ブツ、儒ニホ。中華チュウワにては儒ニホ、仏ブツ、道ミチ」和歌ワカの道ミチとし、茶チヤの道ミチとし、香カウの道ミチといふ。その淵源エンエンにいた

是こゝは大道オウダウとていふは、故コトに各々オノオノ道ミチとなづく。志野宗信シノノムネノブは禅者ゼンシャなるにより、みちびくに禅法ゼンポフを以もてし、建部隆勝ケンベウリョウショウは神道者カムミチノシヤたるにより、伝デンへ事の奥旨オウシを神祕カムヒに傾カす。それ香カウの徳トクたるや、よくけがれを除ノき心ココロをしづめ、心身シンシン清淨セイジヨウにして鬼神クワンシヤンを感格カンカクせしむ。この香徳カウトク、何れの道ミチの介ケともならんものなり。されば我われらごとき学マカばざる者は、茶チヤ香カウによりて道ミチをもとめ、博学ハクガク有道ユウダウの人は、道行道ミチノミチの杖ツエともならむものか。

香道真傳上

同日志野氏の禪法より隆勝の神秘此を  
 志野建部別流とせんや  
 答云隆勝の宗信の孫省巴の門人なり志野  
 流といふは隆勝の流に於けるや或いは穿ち  
 或は苦しみして大志と有りてこれと好  
 好も樂しむ人なり大枝氏曰隆勝が宗信より  
 隆勝の流は尚孟子の流と云ふは隆勝が宗  
 信隆勝ともに香聖也其志と云ふは隆勝  
 隆勝といふも道水波の隔を云ふ隆勝流

以て建部流の祖と尊む  
 又問光方の初め了古齋に十品の奥旨を傳  
 授し凡山老人に閱して秘書を傳へ更に  
 傳元子に需めて「米川流」の奥義を傳ふと聞く  
 皆これ「志野流」なり然るにこの頃人ありて問はば「建部  
 流」と答うその学ぶ所にたがう事は何ぞや  
 答えて云う愚が香学、公のいう所なり三師に學んで  
 事たれりといへどもなお諸家をうかがい秘冊を  
 さぐり、宗信建立の大意を知るもつとも志野流中の

香道真傳上

九

問いて曰く。志野氏は、禪法により、隆勝は、神秘にこれす  
 とならば、志野、建部別流とせんや。  
 答えて云う。隆勝は、宗信の孫、省巴の門人なれば、志野  
 流といふべきなれど、隆勝の道に於けるや、或いは穿ち、  
 或いは苦しみ、しかしてその大意を知り、知ってこれを好み、  
 好みて樂しむ人なり。大枝氏曰く、「隆勝が宗信におけ  
 るは、孔子の後、なお孟子あるがごとし」と。予はいう、「宗  
 信、隆勝ともに香聖なり」と。その志を同じう  
 すといへども、その道、水波の隔てあり。予は、隆勝を

以て「建部流」の祖と尊む。  
 また問う。光方は、初め了古齋に十品の奥旨を伝  
 授し、凡山老人に閱して秘書を傳へ、更に  
 鳴元子に需めて、「米川流」の奥義を傳ふと聞く。  
 皆これ「志野流」なり。然るに、この頃人ありて問はば、「建部  
 流」と答う。その学ぶ所にたがう事は何ぞや。  
 答えて云う。愚が香学、公のいう所なり。三師に學んで  
 事たれりといへども、なお諸家をうかがい秘冊を  
 さぐり、宗信建立の大意を知る。もつとも志野流中の

志野流へ予、初めこの道に入りしより十年、ある  
 時これを思つて得たりとし、又或時疑念大い  
 におこる。誠や古語に曰く、「これを思いこれ思つて通  
 ぜざる刻は鬼神通ず」と。はからずもこの頃、建部  
 隆勝の手書一卷を得、往々の疑惑一時に  
 消じ、香道の幽微を悟る。且つ、それ組香は宗  
 信の好む所にあらず。隆勝に至つて初めてその  
 濫觴を知り、数多組香をなして禁庭に内  
 奏す。ここに至つて組香大いに全し。常白撰

む所の十種香と過半は隆勝の作也惜しいかな、先達  
 建部氏の成功を知る人少なき事を。予、道は宗信を  
 尊むといへども、志野流と唱うる者多家あり。その流  
 混雑す。且つまた、伝へ事の奥義に至つては、悉く隆  
 勝の手書による。故に私に建部氏を推し尊び  
 て余の己

十組之習

古(十)組香と名づけしは「十炷香」「花月香」「宇治山香」  
 「小とり香」「郭公香」「小草香」「系図香」「十炷焼合」「源平

香道真傳上

志野流なり。予、初めこの道に入りしより十年、ある  
 時はこれを思つて得たりとし、また或る時は疑念大い  
 におこる。誠や古語に曰く、「これを思いこれ思つて通  
 ぜざる刻は鬼神通ず」と。はからずもこの頃、建部  
 隆勝の手書一卷を得、往々の疑惑一時に  
 消じ、香道の幽微を悟る。且つ、それ組香は宗  
 信の好む所にあらず。隆勝に至つて初めてその  
 濫觴を知り、数多組香をなして禁庭に内  
 奏す。ここに至つて組香大いに全し。常白撰

む所の「十種香」も、過半は隆勝の作なり。惜しいかな、先達  
 建部氏の成功を知る人少なき事を。予、道は宗信を  
 尊むといへども、志野流と唱うる者多家あり。その流  
 混雑す。且つまた、伝へ事の奥義に至つては、悉く隆  
 勝の手書による。故に私に建部氏を推し尊び  
 て爾(これ)云う、のみ。

十組の習い

いにしえ「十組香」と名づけしは「十炷香」「花月香」「宇治山香」  
 「小とり香」「郭公香」「小草香」「系図香」「十炷焼合」「源平

香身合香也 遠代本川常白十組と及郭公香馬  
 合香と有りて矢数香競馬香二組と入系團香と  
 神代源氏香一源平香及び名所香一  
 十種組合と變じて連理香一なり一是と十種香  
 と名づく不謂十種香字法と香小鳥香小草香競  
 馬香矢數香名不香は月香源氏香連理香く  
 右十種香と撰じて曰組香限り一は十組とて是  
 傳の組香とて一はと定むし然れども初心の稽古事  
 閑なる故に常白男玄察も其弟子蜂谷宗栄とて

かりて古組香のりり水組と名づひ一盤組十組と  
 あり外組と名けり十種香とて五十組と名ぬ  
 以上古組は皆やんごとなきかたがたの組み給う事  
 して古組の組みの稀なりしかも五十組の外にいしえより  
 傳はれる數百組だに「聞くべからず」といえるに、近代「新  
 組」をなし、梓にちりばめ給うかたがたあり。その組、珍らかに  
 して、「古組」にもまさりたるやうなれど、常白、十組に定め  
 られしを、玄察、宗栄補いて「五十組」になし候だに、  
 十種に定めしよりはおとれり。況んや新組は、今しも

香道通傳上

十一

香「鳥合香」なり。近代、米川常白、十組を改む。「郭公香」「鳥  
 合香」をさりて「矢數香」「競馬香」の二組を入れ、「系團香」を  
 補うて「源氏香」とし、「源平香」を改め「名所香」とし、  
 「十炷焼合」を變じて「連理香」となし、これを「十種香」  
 と名づく。所謂「十炷香」「宇治山香」「小鳥香」「小草香」「競  
 馬香」「矢數香」「名所香」「花月香」「源氏香」「連理香」なり。  
 右「十種香」を撰じて曰く、「組香限りなし。この十組にて足る。  
 余の組香聞くべからず」と定む。然れども、初心の稽古事、  
 閑なる故に、常白の男玄察、その弟子、蜂谷宗栄とは

かりて、古組香の内より世組をえらび、並びに「盤組十組」を  
 より、「外組」と名づけ、「十種香」と共に「五十組」となしぬ。  
 「以上、了古齋伝による」古組は、皆やんごとなきかたがたの組み給う事  
 して、したじた(下々)の組みけるは稀なり。しかも五十組の外、いにしえより  
 伝はれる數百組だに「聞くべからず」といえるに、近代「新  
 組」をなし、梓にちりばめ給うかたがたあり。その組、珍らかに  
 して、「古組」にもまさりたるやうなれど、常白、十組に定め  
 られしを、玄察、宗栄補いて「五十組」になし候だに、  
 十種に定めしよりはおとれり。況んや新組は、今しも

みづかきかきと下くのほりもくほりもそは  
わらう人好子十種香の内にもあすたのそ  
して幾組も幾組も聞くなり。然れども、折にふれては、珍しき  
組香もまた一興ならんか。

十炷香といひ十種く組次は洛下空華庵主  
人くくべ山(暗部山)と名づけ十種香をあらはし、香道  
具を凶解して書き写し、世に行はる。また浪花の大枝  
氏著述の『滝の糸』並びに『十炷香の記』等に出でたれば、ここに  
記せず。諸書に云わざる伝えことのみ、ままのべ侍る

ものなり

### 十炷香

又十炷香は組香の発端なり。「無試」あり、「有試」あり。十種  
香小定り入一にや試く或曰や試は志や流有試は  
相阿弥流」とこの説、非なり。「有試」「無試」ともにその濫  
觴は一つなり。秘説たる故、あらはしがたし。  
○いにしえは、「十炷香」を以て「十種香」といへり。されば「栄松  
覚書」に曰く、「十種香」の文字、「種」ともまた「炷」とも書けり。「炷」の  
字は後人の了簡と見ゆ。宗信の時代、皆「種」の字を書か

上々様ならばしらず、下々の憚りもなく組む事には  
あらざらんか。好子、「十種香」の内にもなお十炷をのみ愛  
して、幾組も幾組も聞くなり。然れども、折にふれては、珍しき  
組香もまた一興ならんか。

十炷香および十種の組み様は、洛下空華庵主

人『くらべ山』(暗部山)と名づけ十種香をあらはし、香道

具を凶解して書き写し、世に行はる。また浪花の大枝

氏著述の『滝の糸』並びに『十炷香の記』等に出でたれば、ここに

記せず。諸書に云わざる伝えことのみ、ままのべ侍る

ものなり。

### 十炷香

それ「十炷香」は組香の発端なり。「無試」あり、「有試」あり。十種  
香に定め入りしは「無試」なり。或いは曰く、「無試は志野流、有試は  
相阿弥流」と。この説、非なり。「有試」「無試」ともにその濫  
觴は一つなり。秘説たる故、あらはしがたし。

○いにしえは、「十炷香」を以て「十種香」といへり。されば「栄松  
覚書」に曰く、「十種香」の文字、「種」ともまた「炷」とも書けり。「炷」の  
字は後人の了簡と見ゆ。宗信の時代、皆「種」の字を書か

とよりくふふ栄松尼は宗信の女 是なり人種の字  
 を用いし証拠なり然れどもこの時「炷」の字、間々行わ  
 ゆといふも榮松尼もそのゆえんを知り給わざると  
 又くより當時の香人、皆「十炷香」に「種」の字を書ける  
 は古今世俗の誤りと思えるは非なり。「十種香」を「炷」の  
 字に改められしは、故ありて隆勝、西三条実澄公を以て  
 「三光院殿と号す。実隆公の御孫」「十種香」の濫觴を内奏し給ひし頃、  
 勅して「炷」の字を賜う。これより初めて「十炷香」とよぶ。  
 但し十炷の訓、習いあり」その子細知る人すくなし。その後米川常白、十組

と改らるるは此組香の名は十炷香とす十組の惣  
 名を十種香と名づくその末流これにしたがふ。  
 ○十炷、皆聞きしを「つづ」といふ。これ十聞きし賞という人あり。  
 非なり。「つづ」は十の和訓と心得給うべし。  
 ○十炷、数度に及ばば、替え名を書くべし。「三葉一花之記」  
 「九思一言之記」「十薰四炷之記録」などと書く。また「時雨香」  
 とも書く。これは「十」と「時雨」(じう)とこえ同じきをとれり。  
 然れども世組の内、別に「時雨香」有れば用捨あるべし。  
 ○客という事は、三三が九の香は友なり。一炷は友の香なく

香道真傳上

十三



時の季よりていろいろ草の名ありといえども、  
 桔梗をもとす「かな書き」にて「ききやう」と書けるより  
 香の名目としたるなり。本香によりて「やうきき」  
 「きやきう」などいろいろ変体おかしければ、風情と  
 なれり。然れども、米川、蜂谷にては本香も記録も  
 「一、二、三」にて書き出すなり。時の季の草の名にて聞かん  
 となり。なお時の宜しきによるべし。

小鳥香

諸書小かて詳なり別ニ傳ふ

競馬香

赤方と上座と一玉と下座と大枝氏曰  
 本香十二炷打ちまじえ、内二炷残し、焼き出す事子  
 細ありとなり。加茂のけい馬「すばしり」と云う、故実あ  
 り。それよりかたどると云々。また、或る説に曰く、  
 「けい馬は馬場をかけ抜けるものにあらず。二間ばかり  
 手前にて留まるなり。故に二炷残すなり。」予、案ずるに、これ  
 さく説(鑿説)ならんか。十二炷の内二炷残すも、盤三組の  
 内の一風情なるべし。

香道真傳上

十五

盤の上勝負の事、諸家流大同小異ありといえども

諸書に記されしを此に記せざるなり

矢数香

試色本香十二炷残らず焼く。これ一説に矢数は堂を  
限りに射通すもの故、残らずたくと云えり。大枝氏  
「滝の糸」に云う、「矢数香の組様、古人の心を用いる事みだ  
りに見過すべからず。深き子細あり」と記せり。  
「盤のうえ勝負の事に付き故実をいう。然れどもその証、詳らかならず。  
その上、流芳子『滝の糸』にあらわさざるゆえ、ここにも記せざるなり。  
米川、蜂谷、けい馬香、矢数香に付き伝なし。」

名所香

右の源平香を平の由代風雅ならずなり  
しも其命と蒙り米川氏名不香と改芳野方  
龍田方と記す。盤面、大様源平香と同じ。立物  
つかい様、流々にて少し宛かわりあり。ここに略す。

花月香

○香六種 花一 花二 花三 各試一炷宛

月一 月二 月三 本香一炷宛

花方、月がた、左右にわかれて記録す。聞きに忘  
じて月、花の札を打つ。

香道真傳上

十五

諸書に出でたればここに記せざるなり。

矢数香

試み過ぎ、本香十二炷残らず焼く。これ一説に矢数は堂を  
限りに射通すもの故、残らずたくと云えり。大枝氏  
『滝の糸』に云う、「矢数香の組様、古人の心を用いる事みだ  
りに見過すべからず。深き子細あり」と記せり。  
「盤のうえ勝負の事に付き故実をいう。然れどもその証、詳らかならず。  
その上、流芳子『滝の糸』にあらわさざるゆえ、ここにも記せざるなり。  
米川、蜂谷、けい馬香、矢数香に付き伝なし。」

名所香

いにしへの「源平香」なり。太平の御代、風雅ならざるよし  
にて、貴命を蒙り、米川氏「名所香」と改む。「吉野方」、  
「龍田方」と記す。盤面、大様「源平香」と同じ。立物  
つかい様、流々にて少し宛かわりあり。ここに略す。

花月香

○香六種 花ノ一 花ノ二 花ノ三 各試み一炷宛

月ノ一 月ノ二 月ノ三 本香一炷宛

「花方」、「月がた」左右にわかれて記録す。聞きに忘  
じて月、花の札を打つ。

○香本之事。古代、月方、花方「香本二人」して炷き出せり。然れども、事繁きにより、蜂谷家には香本一人にて勤むるなり。大枝氏にては、今も香本二人なり。もとも「花月香」を三つの組香のその一つとして習いとすと聞けり。「三つの組香」とは「花月香」「焼合香」「連理香」となり。且つまた、花月異名の古組香、品々あり。

予が伝ふる所、習いとする「花月香」別にある。

○点の事。一人聞きならば点三つ、二人聞きは点二つ、三人以下は点一つなり。

○星の事。「花方」にて、花の香を月の香と聞き違える

○記録の事。「花方」、「月方」と別って記す。春は「花方」上座、秋は「月方」上座、夏、冬は花月とつづくに任せて「花」上座とす。認め終つて「花方 点何十、星何十」、「月方 点何十、星何十」と記し、点の数、星の数にて引き落とす、しかして賞多き方を「勝」とす。「持」になるときに

香道真傳上

十七

ハ客と入道如と也

○追加し事む月の六包元のどく本香包へ客  
れも一種入トト七炷の内一炷焼き出す。聞きに  
てれとサ

追加点の事一人聞きは点七つ。これ月花六種にウ  
一炷炷き合わせ、七炷の数なり。二人以下は点三つ。これ花方、月  
方一方の香数なり。星の事、点の数におなじ。

源氏香

○香の組み様、きき様、香の図等の事、並びに「正傍の点」

ハ事ありて習いとす。香人皆知るところなれば、記  
すにおよばず。但し、「源氏香」は組香第一の風流なり。  
惠南老人『くらべ山』に云う。案ずるに「源氏香」は、もと  
古代の系図より出でて、なお優美なり。図も、巻頭の  
「桐壺」と巻軸の「夢の浮橋」をのぞき、「雲隠」  
を抜き、しかも「若菜」には上下を出し、自然として  
巻の図にあい、闇(暗)にして彼の物語の趣意にか  
のう。実に言語道断(言葉にできないほど立派)と云うべし。  
この説、「源氏香」の優美をほめたるはよし。「きりつぽ」  
ハ源氏香の優美とほめたるよし。きりつぽ

香道事傳上

十八

は、「客」を入れ追加を聞く。

○追加の事。花、月の六包、元のどく本香包へ入れ、客の  
香一種入れまじえ、七炷の内一炷焼き出す。聞きに  
てれを打つ。

追加点の事。一人聞きは点七つ。これ月花六種にウ  
一炷炷き合わせ、七炷の数なり。二人以下は点三つ。これ花方、月  
方一方の香数なり。星の事、点の数におなじ。

源氏香

○香の組み様、きき様、香の図等の事、並びに「正傍の点」

という事ありて、習いとす。香人皆知るところなれば、記  
すにおよばず。但し、「源氏香」は組香第一の風流なり。

惠南老人『くらべ山』に云う。案ずるに「源氏香」は、もと  
古代の系図より出でて、なお優美なり。図も、巻頭の  
「桐壺」と巻軸の「夢の浮橋」をのぞき、「雲隠」  
を抜き、しかも「若菜」には上下を出し、自然として

巻の図にあい、闇(暗)にして彼の物語の趣意にか  
のう。実に言語道断(言葉にできないほど立派)と云うべし。  
この説、「源氏香」の優美をほめたるはよし。「きりつぽ」

夢の浮橋とのぞき、雲がくれをぬき、若菜上下  
 を出したるが、彼の物語の趣意に叶うとは何ぞや。一帖  
 にもかけて、闇に趣意に叶うとせんや。空華庵主人  
 も「源氏香」を全く伝えざる人と見えたり。先ず香の図、  
 五筋を以て五十二に変ず。故に五十四帖の二を欠きた  
 り。これによつて「桐壺」「夢の浮橋」の二帖をあまし、別に  
 取り用いて伝へごとす。秘たるが故にここにあらはさず。  
 「若菜上下」は巻の詞あれば、香の図にも名付くる事  
 勿論なり。「雲がくれ」は名ありて言葉なし。『源氏湖月抄』に

雲隠の統一巻有云  
 有云隠有巻名女其詞云法抄一のり  
 巻の名白きるる巻一のり云れり  
 といふ云々  
 云々云々人の逝去といふ云々  
 人の逝去の云々云々命云々  
 妙の取らりて云隠云々云々の巻根  
 れは云々鴨をけふのみ見てや雲隠れなん  
 いかん勝て斗ふべからざれば、この巻「雲隠」といふ。名は

香道真傳上

十九

「雲隠の説」一巻ありて云う。

雲隠、巻の名ありてその詞無し。義、諸抄にあり。

巻の名、匂兵部卿の巻に「ひかりかくれ給いにし」

といえる、その心か。

「雲がくれ」とは、人の逝去をいえる事なり。万葉に

人の逝去のかたとどめえぬ命にしあれば敷

妙の家より出でて雲隠れにき(大伴坂上郎女(天の))「ももつ

ての(百伝云)岩根(磐余(いわれ))

の池になく鴨をけふのみ見てや雲隠れなん(大津皇子(天の))、

この外、勝けて斗ふべからざれば、この巻「雲隠」といふ。名は

源氏薨じ、ましましし事の心をもて付くる名  
あり。以上『湖月抄』の文。以下略す

これ「雲隠」の香包よりよきて、昔は  
も。も。これ木立包の内入包、やのやの包  
と入置し、源氏薨御の心、以て香のふ  
き、と納むとて、まづこれの香包と名付くるなり。  
これ五十二帖の香の図にことごとくその名を出し、  
桐壺薨御の香の図にことごとくその名を出し、  
相違なきは、香の義理を加え、彼といひ、これ  
といひ、一帖も残す所なし。実に風流組香第一なり。

と一帖も残す所なし。実に風流組香第一なり。  
まづ彼は、これの香包と名付くるなり。  
ひつとて、

連理香

初心の聞きおよびがたければなり。諸家、組香の奥義とし、  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。

香道真傳上

源氏薨じ、ましましし事の心をもて付くる名  
なり。「以上『湖月抄』の文。以下略す」

されば「雲隠の香包」という事ありて習いとす。「寸法、  
色、口伝」これは、これ廿五包の内、五包聞きし、そのから包  
を入れ置くなり。その故は、源氏薨御の心を以て、香のな  
きがらを納むとて、「雲がくれの香包」と名付くるなり。  
されば五十二帖は、香の図にことごとくその名を出し、  
「桐壺」「夢の浮はし」は伝えごととし、「雲隠」は名あり  
てこと葉なければ、香包に義理を加え、彼といひ、これ

といひ、一帖も残す所なし。実に風流組香第一なり。  
真に彼の物がたりの趣意に叶い、言語道断ともい  
いつべし。「源氏六十帖といえども、その巻は五十四帖なり。その  
解、諸抄にくわし」

連理香

いにしえより「十」百座に及ぶときはこれをゆるすといへり。もつとも  
初心の聞きおよびがたければなり。諸家、組香の奥義とし、  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。  
また、香道第一の伝授とす。予云う。組香の風流多端なり。



傳の一二をとりて、六玉の石の  
人れをより求め給わば、高きに登るかけ橋も  
あらん物也

伽羅

本朝香乃名、以香家に分て伽羅とよ  
ぶもの六種、最上たる物なり。然れども、濃  
淡、浅く、深きあり。一概に心得べからず。多くは樹宜く筋通り、  
氣能く始終を貫く。いにしえ「東大寺」を以て伽羅  
の最上とし、諸銘これよりわかる。中華には

伽羅と号するものあり。奇南香、黄熟香など  
と称するものあり。「香品数多あり。ここに略す」皆、沈香の品種なり。  
『万宝全書』に云う、「松根は伽羅に似たり」と。予、考うる  
に『翻訳名義集』衆香の篇に「多伽羅」と云う、あり。  
「注に云う、「多伽留、此には根香と云う、大論に曰く、「多  
伽樓は香樹なり」と云々」本朝に香樹を以て「伽羅」  
とよぶは、「多伽羅」の多の字を略していう物なら  
ん。また、「松根」と云う、は、「多伽羅」の翻し、「根香」に本づく  
なるべし。

羅國

香道真傳下

二

伝の一二をあらわす。もしくは六国を尋ね給わん  
人の、これより求め給わば、高きに登るかけ橋  
ともならんものか。

伽羅

本朝、香の総名とす。香家に分かつて「伽羅」とよ  
ぶものは、六種の最上たる物なり。然れども、濃く、  
淡く、浅く、深きあり。一概に心得べからず。多くは樹宜く筋通り、  
氣能く始終を貫く。いにしえ「東大寺」を以て伽羅  
の最上とし、諸銘これよりわかる。中華には

伽羅と号するものなし。「奇南香」、「黄熟香」など  
と称するものあり。「香品数多あり。ここに略す」皆、沈香の品種なり。  
『万宝全書』に云う、「松根は伽羅に似たり」と。予、考うる  
に『翻訳名義集』衆香の篇に「多伽羅」と云う、あり。  
「注に云う、「多伽留、此には根香と云う、大論に曰く、「多  
伽樓は香樹なり」と云々」本朝に香樹を以て「伽羅」  
とよぶは、「多伽羅」の多の字を略していう物なら  
ん。また、「松根」と云う、は、「多伽羅」の翻し、「根香」に本づく  
なるべし。

羅國

け説はゆゑて類し。上品は伽羅に似て妙分。火末小雅は性さわやか。又初聞きに達知れ安きも有り。聞き発逸なる物なり。然れども、香気うすきもあり。木もよく筋立ち、きゃらに似たる物なり。

真南蛮

むかし南蛮より香樹渡る。この香品を真の南蛮と呼びしより名となり、「真南蛮」といふ。鷓鴣斑も同じき程の香品なり。その木色、多くは黒し。また

本所より白きもあり。上品は伽羅に似たりといへども、その氣、重美にして輕揚ならざるなり。故に古書より「真那蛮」上品なし」と。然れども、「無し」といふべからず。少なきなり。蜂谷宗先は、「真那蛮は香氣あらじと、上古『中川』を以て蛮の正しきとす」といへり。もつとも陰香なり。

真南賀

是亦秘名也書記し。上品は初聞き伽羅に似たりといへども、早速「賀」の性をあらわす。古

香道真傳下

この説、口伝ならで蹟しがたし。上品は伽羅に似て聞き分けがたし。火末に羅國の性をあらわすもあり。また初聞きに達知れ安きもあり。聞き発逸なる物なり。然れども、香気うすきもあり。木もよく筋立ち、きゃらに似たる物なり。

真南蛮

むかし南蛮国より香樹渡る。この香品を真の南蛮と呼びしより名となり、「真南蛮」といふ。鷓鴣斑も同じき程の香品なり。その木色、多くは黒し。また

本所により白きもあり。上品は伽羅に似たりといへども、その氣、重美にして輕揚ならざるなり。故に、古書にいう「真那蛮に上品なし」と。然れども、「無し」といふべからず。少なきなり。蜂谷宗先は、「真那蛮は香氣あらじと、上古『中川』を以て蛮の正しきとす」といへり。もつとも陰香なり。

真南賀

これまた、秘名なり。書き記しがたし。上品は初聞き伽羅に似たりといへども、早速「賀」の性をあらわす。古

土香ふまむ香ハ下品也く又ふまふの香あり  
——檀谷宗先ふ香ハ蜜ふと香々細やく  
米川一庵ふま南堂下品也くふへへ魚橋  
なつと上品の本殿中も相あつぬ程の本あり  
予中——い魚橋といふ先ハ通称「真南堂」と  
よぶものふまに香ハ稀あり

寸門陀羅

佐曾羅

右二種の名香小なり故に大枝氏曰古来寸門

陀羅統房羅の流なり米川氏の伝なりは名目  
とるといつては説非也古来より二種ありは  
分明也然とくと近來其間紛らわしきのみ  
小なりと古来陀羅ハ異論も臘梅と以て志野  
家ハ伽羅也——中居光房ハ羅國——中居  
光房兄弟ハ建部隆勝の門人なり坂内宗拾ハこれを「寸門陀羅」といふ  
坂内氏も建部氏の門人なり檀谷宗拾の伝ハ中居光房  
氏ハ門人なり檀谷宗拾の伝ハ中居光房氏  
臘梅の外ハ寸門陀羅ハ名香なり——中井氏曰統房  
羅寸門陀羅ハ名香なり——四國ハ屬たり

香道真傳下

12

書に「真南賀は下品なり」と。また云う、「まなかは、すがり早し」と。蜂谷宗先云う、「賀は蜜よりも香氣細やかなり」と。米川一庵云う、「真南賀、下品なりというべからず。「華橋」などは、上品の伽羅にも相ならぶ程の木なり」と。予、正しき「華橋」をきかず。先ずは通称「真南賀」とよぶものによき香は稀なり。

寸門陀羅

佐曾羅

右二種は、名香になし。故に、大枝氏曰く、「古来寸門

陀羅、佐曾羅の説なし。米川氏の頃より、この名目をみる」といへり。この説非なり。古来より二種ありし証、分明なり。然れども、近來その聞き紛らわしきのみにあらず、古来、既に異論あり。「臘梅」を以て志野家は「伽羅」とし、中居光房は「羅國」と云う。「中居光秀、光房兄弟は建部隆勝の門人なり」坂内宗拾はこれを「寸門陀羅」といふ。「坂内氏も建部氏の門人なり」蜂谷家、宗拾の説に習う。然れども、「臘梅」の外、寸門陀羅に名香なし。中井氏曰く、「佐曾羅、寸門陀羅に名香なし。四國の属たり」と。

此説も大様なれど、この言による時は、佐曾羅、寸門陀羅ともに稀なるにはあらず、よき香の稀なるゆえに名香の撰に入らざると見えたり。今も諸家に論ずる所、各別なり。なお考うべし。

陰陽論

伽羅 羅國 寸門陀羅 陽也  
真南蛮 真南賀 佐曾羅 陰也  
予友某香ふしやる曾其師曰香は陰陽と分かつ事、その理如何其師答曰香は亦分かつ所

と云うべ唯古来北牡と分て使れ使らざれば香の六国と名は陰陽と分りて博識の人考ととと詳なりん宜哉香家者海と分りて序次よりあわく窮へる事ありと同人諾せざして曰く、それ六国を分かつ事聞きの便りともいふべし。陰陽をいう事は、その理なくんばいふべからず。我思うに、六つの達を聞くに、「伽羅」は、陽気にしてその聞き発達温潤にして煙氣和す。これ春といふべき物なり。「羅國」は、香気

香道真傳下

この説も大様なれど、この言による時は、佐曾羅、寸門陀羅ともに稀なるにはあらず、よき香の稀なるゆえに名香の撰に入らざると見えたり。今も諸家に論ずる所、各別なり。なお考うべし。

陰陽の論

伽羅 羅國 寸門陀羅 陽なり  
真南蛮 真南賀 佐曾羅 陰なり  
予の友某、香にふける。曾てその師に問ひて曰く、「香に陰陽を分かつ事、その理いかに」。その師答えて曰く、「我もまた、分かつ所

をしらず。唯、古来、北牡を分けて聞きの便りとするのみ。「香の六国」となづけ、陰陽を分ける事、博識の人、考うれども詳らかならず。宜なるかな。香家者流の聞きを分つの序次たり。しいて穿つべからざるものなり」と。問う人諾せずして曰く、「それ六国を分かつ事聞きの便りともいふべし。陰陽をいう事は、その理なくんばいふべからず。我思うに、六つの達を聞くに、「伽羅」は、陽気にしてその聞き発達温潤にして煙氣和す。これ春といふべき物なり。「羅國」は、香気

伽羅より盛んにして烈しき夏有是夏に  
 法下真南蛮ハ芬芳長大ありといへども  
 輕揚ならず秋殺れ香と帯ぶるごとし。これ秋  
 芥久真南蛮ハ香よりと志げりありて  
 冬蔵の聞きあり寸門陀羅ハ佐曾羅聞き得ずと  
 いへども、これまた、春秋に配すべし。斯くのごとく分かつ  
 時は如何。その師、拍手して曰く、「陰陽の論、古來  
 聞かざる所にして、明訣なる事、暗夜に灯し火を得  
 たるがごとし。誠に公の發明なり」とて甚だ

讚美す。後、友人、予に問答の始終を告げて可否  
 を問う。予、答えて云う、「これなるときはこれ、未だ眞実なら  
 ず」。問う、「如何にかこれ眞  
 實なる」。答えて云う、「それ天地開けて陰陽分かち、陰陽わかれて  
 四時(季)行はる。その陰陽は本にして、四時は末なり。然るに  
 公の發明する所は、香の芬芳を四時にわかち、しか  
 して陰陽有る事を知る。これその末を知つて本を  
 察する物なり。既に中華にも牝牡を云える事  
 あり。奇南香を陽とし、沈香を陰とし、しかして  
 陰陽の体用を云う。こゝを以て見る時は、本朝香

香道真傳下

道始りて味小六つ品と定めしと陰陽とを  
て而して後分ける物なり。陰陽は事の始めなり。  
好士、牝牡を自得する時は、百支百木わかつに難  
き事なし。これ香家秘する所なれども、その実  
を告ぐる物なり。

### 五味之辨

伽羅羅國より辛味多し、真南蛮  
より酸味多し、大槌下より  
鹹味多し、六國の内、伽羅羅と名付けし一種  
にも数品あり。これをわかつには、時代の新古、香

### 一際云々

○香家宗匠、香に「五味」といふ事ありて習  
いとす。これはこれ、「六つの達」をわかちし上をまた、分か  
つのであり。六國の内、「伽羅羅」と名付けし一種  
にも数品あり。これをわかつには、時代の新古、香  
の善悪、五味の聞きなり。その聞きに、或いは甘、辛、苦、酸、  
鹹あり。然れども、一味ばかりの聞きは、甚だ稀なる物なり。  
或いは苦くして辛みをかぬ、また甘くして酸きもあり。  
二味と兼ね、三味をかぬといへども、甘き方多

香道真傳下

七

道始りて、聞きに六つの品を定めしも、陰陽を知り  
て、しかして後分ける物なり。陰陽は事の始めなり。  
好士、牝牡を自得する時は、百支百木わかつに難  
き事なし。これ香家秘する所なれども、その実  
を告ぐる物なり。

### 五味の弁

「伽羅」、「羅國」には、辛く、甘く、苦き味多く、「真南蛮」、  
「真南賀」には甘く、酸く、鹹き類多し。大槌下品に、  
からきはまれなり。酸く、鹹き香に上品は少なし。然れども、

一概には云いがたし。

○香家宗匠、香に「五味」といふ事ありて習

いとす。これはこれ、「六つの達」をわかちし上をまた、分か  
つのであり。六國の内、「伽羅羅」と名付けし一種

にも数品あり。これをわかつには、時代の新古、香

の善悪、五味の聞きなり。その聞きに、或いは甘、辛、苦、酸、  
鹹あり。然れども、一味ばかりの聞きは、甚だ稀なる物なり。

或いは苦くして辛みをかぬ、また甘くして酸きもあり。  
二味を兼ね、三味をかぬといへども、甘き方多

くれは甘く〜苦き事大なれば「苦」とす。蜂谷  
 家「一味香といふ物ありて傳とす。その外、宗  
 匠「五味の聞き本」といふ物あり。予、折にふれ聞く  
 事もありしかど、その一味の聞き、その伝と相違  
 する様に覺えたり。五味の聞き、以心伝心にして口  
 に言われず。香によりても、甘き聞き本、甘くなきと  
 思えばよしなし。さすれば、五味の聞きありという事  
 を知りて、自身自得すべし。上古、加(斯)様の事によ  
 りて参禅すべきため設けたるなり。よくよく御工

夫有るべき事なり。

或るひと問ひて曰く、「中華、香に五味をいう事は舌に  
 味わう事なり。国朝にも、薬店などは、舌に味わうて、その  
 善悪をしれり。聞きの五味と、一般なりや否や」。  
 答えて云う、「中華、香を論ずる事数々なり。味を云う  
 事は、舌に味わう事なり。また「これを焼けば、その味わい  
 酸し」などと書けるもあれば、聞きの五味ども見えたり。  
 事繁き故、ここに論ぜず。なお考うべし」。予、香  
 を聞き、また舌に味わい、或いは木色を見るに、聞きによ

香道真傳下

此ハ舌小味してとましく木色もよくと能く  
 冥哉秘傳書小も香と出で知れど此を  
 木色と見てとましく善悪と知れどいり唯香  
 小なる人の境より脱してとましく可也と  
 知り千里なるを竹へ書傳へ身は傳へる  
 千里万里なるを巻くも解ゆるも禪法によ  
 ゆるい牽強と説小なり此より提擲すべき  
 事なり

香し茶湯の事

香の茶といへる事あり。香人は、これを秘して香  
 家の事とし、茶人は、無用の事とす。故に、秘  
 事なるのみにして行われず。いにしへの香人は、皆  
 これ茶人なり。茶人、これ香人なり。茶会に、興に乗  
 じ、香を出せるを「香の茶」と名付く。既に千利休、  
 雪のあした、みの笠して藪内紹智の宅に  
 おとづれられしに、すぐに待合に通し、しばらく  
 くして迎いに由でられたり。利休これに対し、小炉  
 を袖にし、香を炷き、亭主へ出されたりしに、紹

香道真傳下

九

きは、舌に味わいても、また木を見ても能きなり。  
 宜なるかな、『秘伝書』にも、「香を聞きて知れがたきは、  
 木色を見てその善悪を知る」といへり。唯、香  
 にふける人は、様々に修行して、その可否を  
 知り給うべし。書き伝え、言い伝え、耳を聳つれば  
 千里万里となる。兎にも角にも、禪法によ  
 るとは、牽強の説にあらず。工夫提擲すべき  
 事なり。

香の茶湯の事

香の茶といへる事あり。香人は、これを秘して香  
 家の事とし、茶人は、無用の事とす。故に、秘  
 事なるのみにして行われず。いにしへの香人は、皆  
 これ茶人なり。茶人、これ香人なり。茶会に、興に乗  
 じ、香を出せるを「香の茶」と名付く。既に千利休、  
 雪のあした、みの笠して藪内紹智の宅に  
 おとづれられしに、すぐに待合に通し、しばらく  
 くして迎いに由でられたり。利休これに対し、小炉  
 を袖にし、香を炷き、亭主へ出されたりしに、紹

智うけぬ赤小爐と袖よりかゝり休翁へ参ら  
 せられければ、利休も心懸けふかき事を感じ、甚だ  
 興せられたりとなり。また或る時、利休、細川三齋公と  
 共に、津田宗及方へ茶湯の約束ありしに、前宵  
 より雪降り、飛び石もうづむ(埋)ばかりなり。利休、三齋公へ  
 申され候は、「かやうの時は早々参るものにて候」とて  
 夜込みに伴い参らる。宗及も用意あり。露地の  
 扉明けかけて灯籠の火影幽かに見え申す。露地入りあり、  
 案内とひとしく迎えに出でられ、茶席へ請じ、床に

不破の香爐とがり香中にて別して寒じ申し候。香  
 爐と侍より手御あたたため候へ」となり。利休、挨拶  
 して香爐をおろし、香を聞き、三齋公へまわし、さて  
 香の銘を尋ね申され候えは「月」にて候となり。利休  
 も巾着より香を出し、つがれ(繼)候。この雪中の作意、  
 「宗及一生の出来茶湯たるべし」と利休、毎度  
 賞美せられ候。細川候、利休へ、この茶の湯少しも  
 瑕はなきかと御尋ね候えは、休、「難を申さば、香に『月』を  
 炷かれ候事、『月』『雪』の縁、少し風情過ぎたるにや」と申

香道真傳下

+



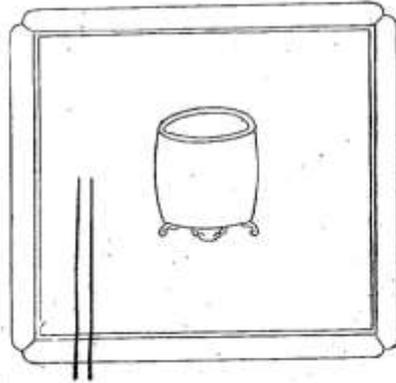
方盆

香炉真中に置く

但しかき上げ灰

右の方

香箸飾る



方盆

香炉真中に置く。

「但しかき上げ灰」

右の方

香箸飾る



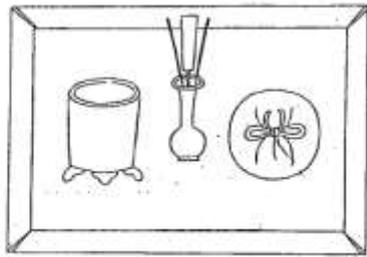
長盆

大香袋内香 銀葉入

火道具立灰押 香箸

香炉

但し香若木小形南蛮高麗物さはりり小



長盆

大香袋「内に香、銀葉入る」

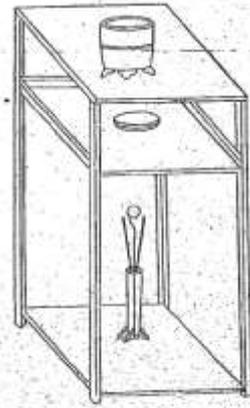
火道具立「灰押、香箸」

香炉

但し香箸、木にあらず。南蛮、高麗物さはり(佐波理)等よし。



志野卓  
飾



すべて卓小まじり候時は香炉持出し飾り候  
とろ一卓もまじり候

先一炷客にきけん欲する時は盆にかざり  
りあれば盆ともにおろし、火取香炉に火を取り持ち  
出でて、聞香炉に火をうつし、かざり付け候。具にて灰を  
調(ととの)え、香袋、香合等の内より銀葉取り出し、香  
箸にて香を置き、客へ出す。客、次へ一礼し聞き、  
次第に廻す。多人数ならば一遍、少なければ二遍。  
もつとも香により、または、客より乞われ候わば、数篇も廻す  
べし。さて、亭主へ香炉帰り候時、亭主とくと聞き、  
香をあげずそのまま置き、衆中へ所望すべし。

香道真傳下

十三

志野卓

飾り

すべて卓にかざり候時は、香炉持ち出し飾り候。道具  
おろし、卓そのままに置く。

先ず、一炷客にきけん欲する時は、盆にかざり  
りあれば盆ともにおろし、火取香炉に火を取り持ち  
出でて、聞香炉に火をうつし、かざり付け候。具にて灰を  
調(ととの)え、香袋、香合等の内より銀葉取り出し、香  
箸にて香を置き、客へ出す。客、次へ一礼し聞き、  
次第に廻す。多人数ならば一遍、少なければ二遍。  
もつとも香により、または、客より乞われ候わば、数篇も廻す  
べし。さて、亭主へ香炉帰り候時、亭主とくと聞き、  
香をあげずそのまま置き、衆中へ所望すべし。

連衆の内、傳人と欲する人、今一応御きかせ下され候え」と挨拶し、香炉を請い、すがりを聞く。さて「麝香にて候えども一種つぎ申すべき」といい、「御かえし申し請けたき」などと挨拶し、はな紙を折り、返しを入れ、しかして継ぎ出す。連座次第に斯くのごとし。但し、初心は先へ継ぎ、功者は跡にのこる事、定法なれども、時宜によるべし。もつとも、継香の詠も弁(わきま)えざる初心の人は、香炉を請わず、亭主へ香の戻りし時、「一種御焼き下さるべし」というて、香袋ともに亭主へ出すべし。

○凡そ継香の事は、香人嗜むべき第一の事なり。最初焼き出す香は、連歌、俳諧の発句のごとし。その席により風情様々なり。大様、その時の季の香名を「露」に「しら菊」、「雲井」に「在(有)明」などと継ぎ合わすべしとなり。月に「在明」、「八橋」に「杜若」、「梅がえ」に「鶯」などよろしからず候。凡そ連歌の付け合わせのごとくいへども、それはひろし。これは、唯その銘により継ぎ

香道真傳下

十記

合はくおれが五種おれが（時のみ名）おれが  
 十種所持おれが十の名小おれがいんぞおれが  
 らいおれがとおれが法とおれが人おれがやおれがれおれがれおれが  
 興おれがうおれが一おれが也おれが亦おれが一名おれが小おれが長おれが有おれが  
 秋おれが有おれがきおれがくおれがばおれがくおれがのおれがもおれがくおれがのおれが中おれが古おれがくおれが名おれが香おれが  
 世おれがのおれが多おれがるおれが也おれが引おれが奇おれが。世おれがなおれがりおれがしおれがれおれがはおれがりおれが  
 季おれがよりおれがておれがはおれが夏おれがなりおれが。またおれが、古おれがきおれが香おれが名おれがにもおれが「はおれがつおれが音おれが」  
 ありおれが。引おれが歌おれが「山おれが高おれがみおれが雪おれがふるおれが巢おれがよりおれがうおれがぐおれがひおれがすおれがのおれがいおれが」

はる初音おれがとおれがふおれがもおれがきおれがつおれがるおれが（後拾遺集二〇 大中臣能宣）。引歌、季にと  
 りては春なり。かくのごとき類少なからず。継香の  
 時は、或いはその名の引歌に付きて、春ともし、夏とも  
 し、またその名によりてつぎ、引歌にかかわらず、且つまた、  
 前香によりて我が香の氣をてんじなど、彼と  
 いい、これと云い、その風情多端なり。故に、初心は先へ継ぎ、功  
 者は跡にのこるなり。蜂谷家、継香に沈外を焼く事  
 を口伝とするも、よしある事なり。兎角、香の銘に心  
 を留めよせ、和歌の道に入るの媒とは、むべなる事なり。

香道真傳下

十五

合わすとなれば、五種所持の時は、五名にかぎり、  
 十種所持なれば十の名に限る。いかんぞ（如何）さり（然）き  
 らい（嫌）をなし法をかぎらんや。しかれども、猥りなれば  
 興うすし。心を用いる事第一なり。且つまた、一名に春あり  
 秋あり。たとえば「はつ音」という香は、中古の名香、  
 世の知る所なり。引歌「聞くたびに珍らしければほとと  
 ぎす」もはつ音のこちこそすれ（金葉集二度本二〇 永縁）。この引歌、  
 季によりては夏なり。また、古き香名にも「はつ音」  
 あり。引歌「山高み雪ふる巢よりうぐひすのい」

づる初音をけふもききつる（後拾遺集二〇 大中臣能宣）。引歌、季にと  
 りては春なり。かくのごとき類少なからず。継香の  
 時は、或いはその名の引歌に付きて、春ともし、夏とも  
 し、またその名によりてつぎ、引歌にかかわらず、且つまた、  
 前香によりて我が香の氣をてんじなど、彼と  
 いい、これと云い、その風情多端なり。故に、初心は先へ継ぎ、功  
 者は跡にのこるなり。蜂谷家、継香に沈外を焼く事  
 を口伝とするも、よしある事なり。兎角、香の銘に心  
 を留めよせ、和歌の道に入るの媒とは、むべなる事なり。

此は二子打より炷き継ぎをせしに、その伝も薄く、香の道の専攻もつたなけれども、歌道に心がけよき人は、その風情、自ずからあたれり。かえすがえすも、つぎ香の風情は、連歌俳諧の付け合わせによりて、またよらざる風情、專一と心得給うべき事なり。

香道真傳下終

書香道真傳後  
神禪之教。吾國傳之尚矣。人皆知神禪之為神禪。而未知香道之有神禪也。宗信禪之欲。以傳其心。隆勝神之欲。以教其真。名道異。而其趣同。是香之為道也。神禪。非縁香道。香道。無非心真道。名異而於所至同。是香之為教也。蓋自建志之相師友。而以下為道者多岐矣。若横

香道真傳 跋

この頃、二、三子打より炷き継ぎをせしに、その伝も薄く、香の道の専攻もつたなけれども、歌道に心がけよき人は、その風情、自ずからあたれり。かえすがえすも、つぎ香の風情は、連歌俳諧の付け合わせによりて、またよらざる風情、專一と心得給うべき事なり。

香道真伝 下終

書香道真伝後

神禪の教え、吾が国これを伝うること尚し。人皆神禪の神禪たることを知りて、未だ香道の神禪有ることを知らざるなり。宗信これを禪にして、以て、その心を伝えんと欲し、隆勝これを神にして、以て、その真を教えんと欲す。各々道異にして、その趣同じ。これ香の道たるなり。神禪、香道に縁するに非ず。香道、心真に非ざること無し。道各々異にして、至る所に於いて同じ。これ香の教えたるなり。蓋し、建志が相師友よりして、以下道を為す者多岐なり。各々横奔(はし)りて

香ク不知ラ向カ上リ一ノ路ヲ。獨ニ吾ノ兄ト。栖セ栖セ香ノ道ヲ。而シテ頗ニ好ム得ル矣ハ。玄ノ旨ヲ。故ニ撰シ此ノ書ヲ。名曰香ノ道ノ真ノ傳ト。予亦記ス其ノ事ヲ。以テ冀ス其ノ道ヲ。或由是而有ル筆已。

安永丙申初冬甲子

關忠卿書



問讀真傳 全部二冊 近刻  
參考銘香傳 全部二冊 近刻

任任齋藏板

尾陽

名護屋

藤屋吉兵衛

浪速

心齋橋

大野木市兵衛

東都

日本橋一丁目

須原茂兵衛

皇都

堀川通佛光寺下

植村藤右衛門

同

五条橋通高倉東上

北村四良兵衛梓

向上一路を知らず。独り吾兄、香道を栖栖(せいせい)して頗(すこぶ)る好みて玄旨を得たり。故に、この書を撰し、名づけて『香道真伝』と曰う。予、また、その事を記し、以て、その道、或いはこれに由りて革(改)まること有らんことを冀(こいねが)うのみ。

安永丙申初冬甲子

関忠卿書 在判

問讀真傳 全部二冊 近刻  
參考銘香傳 全部二冊 近刻

任任齋藏板

尾陽

名護屋

藤屋吉兵衛

浪速

心齋橋

大野木市兵衛

東都

日本橋一丁目

須原茂兵衛

皇都

堀川通仏光寺下

植村藤右衛門

同

五条橋通高倉東上

北村四良兵衛梓

【巻頭跋文の訓読案】

(北)宋の(詩人)洪芻(こうすう)『香譜』を撰ず。

蓋し楽曠者の為にこれ言うならん。

それ炷香は、能く令人の居間に実りて、茶窓の佳友にして文房の雅翫なり。

これ聞く者、怡々朗々(いろいろろろ)喜び楽しむさま)として、唯、其の一美物を知るなり。

其の氣、清爽にして、通ずる人の鼻根、了々(りようりよう)はつきりする)として汚濁有らず。

因つて、君子有るに似たる者なり。然して、其はこれ翫びなり。

苟(いやしく)も其の人に非ずば、則ち風流、虚しく行われざるなり。

昔は宗信、香を立て始め、則ち今また親卿『真伝』これを為す。

いわゆる能事(のうじ)なすべきこと)畢んぬ。世の好香者増す事、ここに則ち当を失わず。

其の風流を為すのみ。

令和六年二月

『香筵雅遊』 國井和裕